

彦根城博物館だより

101

2013.6.1



資料紹介

能面のうめん狸々しやうじやう是閑吉満作ぜかんよしみつ

当館蔵

その名称と同名の演目「狸々」専用のもので、面裏の、緑青を埋め込んだ「天下一是閑」の焼印から、桃山時代に活躍した是閑吉満（一五二七？～一六一六）の作と分かります。是閑は、文禄四年（一五九五）に、豊臣秀吉から「天下二」の号を許された名工。本面も、上下の瞼の微妙な膨らみや、きゅつと上がった口元の張りなどが、巧みに表現されています。

狸々とは、酒を好み、酔って舞い戯れる中国の妖精。この演目は、高風という、揚子江のほとりに住み酒を商う孝行者の元に狸々が現れ、汲めども尽きない不思議な酒壺を授け、祝福するという、めでたい祝言能の一つです。

狸々の特徴は、顔全体に施された朱彩色と、何と言っても、満面に笑みを浮かべたその表情です。弓形に細められた目、高く引き上げられた口元、上下の歯も露わに開いた口。この屈託のない怪しい笑みが、妖精という狸々の性質を一層強調しています。

このようなはっきりとした笑顔は、笑いの要素が乏しい能面の中では、実は珍しいものです。それが表されるのは、狸々が妖精という神秘的な存在であること、そして演目がめでたい祝言能であることに由来すると言えるでしょう。

(茨木恵美)

企画展

6/7 (金)
7/9 (火)

展示室1・2

新収蔵記念

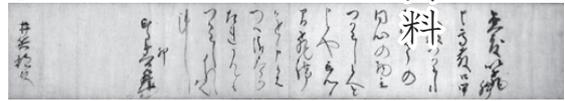
彦根藩筆頭家老・木俣清左衛門家資

木俣清左衛門家は彦根藩筆頭家老を務めた家です。徳川家康の家臣であった初代守勝は、侍大将となつた若き井伊直政の補佐を家康から命じられ、直政の重臣として活躍しました。以来、代々筆頭家老の重責を担い、江戸中期以降は大名に匹敵する1万石を治めました。

それを記念し、これらを紹介する展覧会を開催します。家康が直政へ守勝の出陣を命じた自筆書状など、彦根藩草創期の歴史を解き明かす新出史料も初公開します。

- ギャラリートーク
- 日時 6月8日(土) 14時
- 講師 野田 浩子(当館学芸員)

徳川家康自筆書状



テーマ展

7/20 (土)
8/20 (火)

展示室1

将領の武具

—将軍家と朝廷からの贈り物—

金粟地菊紋時給鎧糸太刀拵



金粟地無時給鎧細鞍

泰平の世にあつても、刀剣や甲冑など武具類は、武家を象徴する道具として重要な役割を担っています。譜代大名筆頭の地位にあつた井伊家は、将軍家と朝廷から褒賞や返礼として刀剣や馬具などを贈られる機会が多くありました。

本展では、当館所蔵の井伊家伝来品のうち、拝領した武具を紹介します。葵紋や菊紋が置かれた武具、金時給や螺鈿などできらびやかに装飾された武具など、格式ある品々をご覧ください。

- ギャラリートーク
- 日時 7月20日(土) 14時
- 講師 古幡 昇子(当館学芸員)



●●常設展示●●

“ほんもの”との出会い

—彦根藩井伊家伝来の大名道具を中心に 80点あまりを展示—

展示室2～3、5～6 *6/7～7/9は展示室3、5～6のみ



教室・講座

●彦根城博物館出張講座「あなたの街の歴史探訪」●

彦根市内のそれぞれの地域は、実に個性的な歴史に彩られています。本講座では、博物館学芸員が各公民館を単位とした地域の歴史を取り上げ、その地域が歩んできた歴史の特徴をわかりやすく紹介します。平成25年・26年で、市内の公民館を1巡します。

■日時・内容・会場

- 第1回 8月3日(土)「稲枝地区の歴史」(稲枝地区公民館) 定員100名
 - 第2回 8月31日(土)「東地区の歴史」(東地区公民館) 定員63名
 - 第3回 9月7日(土)「旭森地区の歴史」(旭森地区公民館) 定員100名
 - 第4回 9月28日(土)「南地区の歴史」(南地区公民館) 定員100名
- *各回とも、午前10時から11時30分まで

■資料代 各回100円

■受講方法 当日受付(事前申し込み不要。先着順)

●キッズサマースクール●

夏休み期間中、狂言や茶道などの伝統文化や歴史に親しむ「キッズサマースクール」を開催します。バラエティに富んだプログラムを準備しましたので、ふるってご応募下さい。

【内容・日程】

- ①狂言教室(小学5・6年生対象)
 - 日程 7月下旬～8月中旬の7日間
 - 講師 和泉流狂言師 小笠原 匠氏(ほかに近隣在住の狂言師)
 - 定員 12名(先着順)
 - ②博物館体験(小学1～6年生対象)
 - 内容 博物館探検、茶の湯体験など
 - 日程 7月下旬～8月中旬の2日間
 - 1～3年生:13時30分～15時30分
 - 4～6年生:10時～12時
 - 定員 1～3年生:40名、4～6年生:20名(先着順)
 - 講師 当館学芸員
 - 会場 当館(能舞台・講堂 他)
 - 対象 原則として彦根市・米原市・豊郷町・甲良町・多賀町・愛荘町在住の小学生
 - 【申込方法】各小学校に配布する案内チラシの申込用紙に記入し、持参・郵送・ファックス通信のいずれか。電話による仮申込も可能。
 - 【申込期間】6月17日(月)～7月7日(日)
- *傷害保険料200円が必要です。



テーマ展
8/23(金)
9/17(火)

展示室1
源氏物語と伊勢物語

平安時代の在原業平をモデルに、和歌を軸に描かれた『伊勢物語』。伊勢物語の影響を受けて紡がれた、壮大なスペクタクル小説『源氏物語』。二作品ともに、時代を通じて多くの人々に愛読されてきました。

これらの物語のイメージは、文字でのみ伝えられてきたわけでありません。絵巻や屏風などの物語絵が、イメージの形成に大きな役割を果たしてきたのです。江戸の傍らの幼い男女を描くのは、伊勢物語の「筒井筒」の段、男君二人が舞楽の青海波

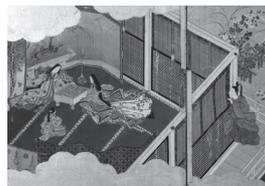
を舞う姿をあらわすのは、源氏物語の「紅葉の賀」の帖というように、すぐさま場面が特定できるのは、人々の間に広くイメージの共通理解があるからこそです。

本展は、館蔵品の中から、伊勢物語と源氏物語の写本や、これら物語を題材とする絵画や工芸品などを展示します。受け継がれてきた雅やかなイメージを堪能ください。

- ギャラリートーク
- 日時 8月24日(土) 14時
- 講師 高木 文恵(当館学芸員)



源氏物語図屏風部分



企画展
9/20(金)
10/22(火)

展示室1
近江と能

— 霊場・名所・物語 —

能は、南北朝時代から室町時代初期に、観阿弥(一三三三〜一三八四)と世阿弥(一三六三〜一四四三)によって大成され、それ以来、多くの演目が作られました。その数は確認されているだけでも約二〇〇〇番にのぼりますが、この中には近江を舞台とするものが少なからずあります。

本展では、その内、「竹生島」「白鬚」「三井寺」を取り上げます。演

目で使用する面や装束、あるいは賑わう境内の様子を描いた絵画などを展示し、古くから霊場として広く信仰を集め、また名所として知られた寺社を舞台とする演目を通して、近江と能の関わりを紹介します。

- ギャラリートーク
- 日時 9月21日(土) 14時
- 講師 茨木 恵美(当館学芸員)



能面 泥黒鬚 甫関満猪作



能装束 厚板 紅黒段替紗門 亀甲縮妻雲電波丸文様

能・狂言



●水無月狂言の集い●

8月22日(土)
18時30分開演(18時開場)
大蔵流狂言「鷄智」 茂山童司
「太刀奪」 茂山逸平
「六地藏」 茂山千三郎
■A席(正面席) 3千5百円
B席(脇正面席) 3千円 全席指定
チケット 発売中

●夕涼み狂言の集い●

8月3日(土)
18時30分開演(18時開場)
大蔵流狂言「萩大名」 茂山千五郎
「呼声」 茂山宗彦
「濯ぎ川」 茂山七五三
■A席(正面席) 3千5百円
B席(脇正面席) 3千円 全席指定
チケット 7月3日発売開始

●第47回 彦根城能●

9月29日(日)
16時開演(15時30分開場)
宝生流能「井筒」 辰巳満次郎
和泉流狂言「苞山伏」 小笠原匡
宝生流能「小鍛冶」 白頭 宝生和英
■A席(正面席) 5千5百円
B席(脇正面席) 5千円 全席指定
チケット 8月29日発売開始

*開演時刻・演目・出演者等は、都合によりやむなく変更することがありますので、ご了承ください。
*チケットは本館受付および電話にてお求めいただけます。
*発売初日は、窓口販売9時、電話販売10時。
*未就学児の入場はお断りいたします。

臨時休館のお知らせ

7月10日(水)から7月19日(金)までの期間、博物館資料整理のため臨時休館いたします。

スケジュール

9月	8月	7月	6月
29日 土 第47回 彦根城能	10日 土 古文書のみかた④	20日 土 「拝領の武器―将軍家と朝廷からの贈り物―」 ギャラリートーク	8日 土 「新収蔵記念」 彦根藩家老・木保清左衛門家資料 ギャラリートーク
21日 土 「近江と能」 ―霊場・名所・物語― ギャラリートーク	3日 土 夕涼み狂言の集い	6日 土 古文書のみかた③	15日 土 古文書のみかた②
14日 土 古文書のみかた⑤	24日 土 「源氏物語と伊勢物語」 ギャラリートーク	7/10・15・19 臨時休館	22日 土 水無月狂言の集い
企画展 近江と能 ―霊場・名所・物語― 9/20~10/22	テーマ展 彦根藩家老・木保清左衛門家資料 6/7~7/9	企画展 彦根藩家老・木保清左衛門家資料 6/7~7/9	テーマ展 彦根藩家老・木保清左衛門家資料 6/7~7/9
9/17~19 展示替により一部休室	8/21・22 展示替により一部休室	6/4~6 展示替により一部休室	6/4~6 展示替により一部休室

*「古文書のみかた」は事前申込制です。

金亀玉鶴



足軽辻番所はどのような場所だったか

旧彦根城下町南部の旧芹橋十二丁目（現彦根市芹橋二丁目）に、「足軽辻番所」と呼ばれる江戸時代の建物が伝わり、彦根市指定文化財となっています。足軽は、江戸時代の大名家などの軍団において、騎馬武者とともに主戦力の役割を担った、弓矢もしくは鉄砲を用いる歩兵でした。彦根藩では、弓足軽六組、鉄砲足軽三組、計三七組一二〇人を数えました。居住区としてもまとまりを持つ足軽組に一箇所ずつ「番所」が置かれ、多くは見通しのきく道路の交差点、すなわち「辻」の角地に置かれたので、「辻番」、「辻番所」と呼ばれました。

城下町の道路や区画がよく伝わる現市街地の中でも、辻番所が残る芹橋地区と池須町、栄町（旧中敷）地区一帯の旧足軽町（足軽の集住地）は、足軽屋敷の建物と、同一規模の屋敷地が整然と配置された街区からなる景観が特徴的な場所です。今、芹橋地区では、「彦根辻番所の会」が結成され、辻番所を核とした、地区の歴史的伝統を活かした町づくりの取り組みが進められています。

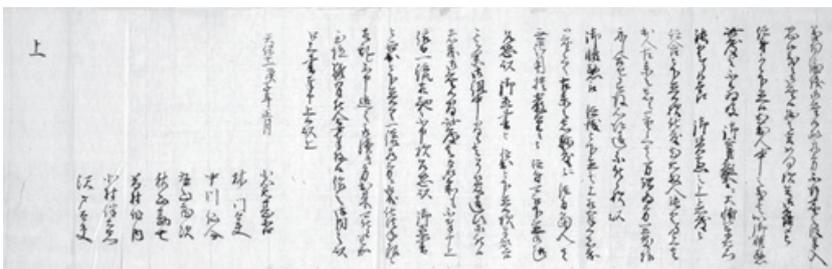
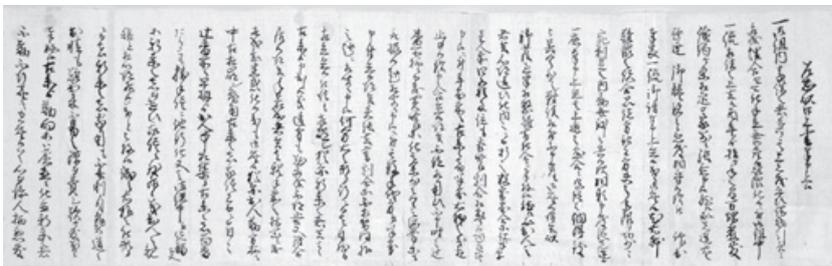
ここでは、江戸時代の足軽辻番所が足軽組屋敷の住人、すなわち足軽たちにとってどのような意味を持つ場所であったのかを、中敷組の足軽であった滝谷家に伝わった一通の古文書から見ていきます。

江戸時代の後期、天保十一年（一八四〇）に、中敷一丁目から同三丁目に集住する鉄砲足軽三十人組の手でであった小倉甚吉・林門太夫および小屋頭と推測さ

れる六名が連名で、物頭（藩主から足軽組の支配を命じられた上級藩士）に宛て、口上書を作成しました（滝谷家文書）。写真）。

口上書の主旨は、「我が儘」に振る舞う組内の古参の「出人」に対し、物頭から嚴重注意をしてほしいというものでした。「出人」とは、足軽の内、町奉行所など藩の各役所に役人として出向している者で、中には数十年勤続し、実務者として役所を取り仕切り、力を振るう者もいました。

口上書では、「出人」が折々寄り合い飲食の浪費をし、



天保十一年 小倉甚吉等口上書控（滝谷家文書） 冒頭（上）と末尾（下）

辻番所でも買い食いをおこなっていること、そのため新参の「出人」で「年若なる者」が親との関係が差し支え迷惑していること、さらに、古参の「出人」は辻番の当番に当たっていても外出し、組内への触れの伝達などを新参の「出人」に代動させていること、などが組内の秩序を乱す行為として批判されています。

口上書には、これまでの対応の経緯もあわせて記されています。まず最初に、古参の「出人」を「年寄前」に呼び出し、飲食の寄り合いをやめるように申し含めたが聞き入れられず、次に、手代の所に呼び寄せ、やめるように命じたが、効果がなかった。そして最終的に、手代たちでは解決が困難であるため、物頭から古参の「出人」に対し、心得違いをしないように申し渡してもらおうように口上書を提出したとします。

以上の口上書からは、足軽組内のさまざまな地位や関係を見て取ることができます。第一に、足軽手代・小屋頭・足軽の関係です。これは、歩兵である足軽の軍事組織の命令指揮系統です。第二に、「年寄」——「年若なる者」の関係です。これは、足軽組の成員の年齢すなわち老若による秩序であり、生活共同体的な関係です。第三に、古参の「出人」——新参の「出人」の関係です。これは、軍事とは異なる藩の行政組織との関係により組内にもたらされた関係です。

口上書に書かれた組内での対立は、足軽組の本来的な軍事的組織の関係や生活共同体的な関係により形づくられている組内の秩序に対し、組から藩の役所への出向者を出すことによって生じている「出人」の関係が抵触していたものと理解できます。ここで注目すべきは、辻番所が一つの焦点となっていることです。足軽たちにとって、組の警護施設であり、組内への命令通達の中継点でもあった辻番所は、組の公共の場でもあったと考えられるのです。（渡辺 恒一）